

タイトル	買買提力提甫教授・本城誠二教授の退職挨拶並びに略歴・業績等
著者	
引用	北海学園大学学園論集(175): iii-xxii
発行日	2018-03-25



買買提力提甫 教授

漂流から北海学園大学に定着

買 買 提 力 提 甫

私はシルクロードの中央部に位置するウイグル地方の出身で、トルク系ウイグル人です。シルクロードは、国際貿易の道である一方、宗教伝来の道、東西文化交流の道もあります。ウイグル地方は、歴史上東トルキスタンと呼ばれ、特に9世紀以来、西ウイグル王国、カラハン朝、カシュガル・ハン国を経て言語文学、音楽舞踊、農業・牧畜・園芸、医学医療などを含めて独特なウイグル文化が形成されました。その影響は、中国やインド、ペルシャ、アラビアなど諸地域に及び、さらにその波は日本にまで達しました。

残念ながら、満州人・モンゴル人のジュンガル帝国征服に巻き込まれ、ウイグル地方は、1884年から新しい領土という意味で新疆省と名づけられ大清国に併合されました。

辛亥革命以降、ウイグル人は各地で蜂起し、1933年に東トルキスタン・イスラム共和国を建国しましたが、漢人軍閥・回族軍閥・ソ連の連合に潰されました。1944年にソ連から戻ったウイグル留学生らは先頭に立って、カザフ人やキルギス人、ウズベク人、タタール人などトルコ系民族、乃至モンゴル人、シボ人と連合して、ソ連の支援で東トルキスタン共和国を創り上げました。

1949年、東トルキスタン共和国に対して中華人民共和国の毛沢東は、ソ連領事館を介して平和協定を結びたいという電報を手渡しました。スターリンの強要により、東トルキスタン共和国主席、総理、軍参謀長、軍官司令官などの5名はソ連機に乗せられ、ソ連経由で北京に向いましたが、8月22日にソ連領空チタ付近に墜落、全員死亡したというニュースが伝えられました（ソ連崩壊後の情報によると、5人は旧ロシア皇帝の馬小屋で処刑された）。スターリンと毛沢東の陰謀で東トルキスタン共和国は自分たちのリーダーを失いました。その後中国共産党軍はソ連軍の爆撃機、戦闘機延べ1万2千機余りの支援で東トルキスタンに進軍しました。10月に東トルキスタン共和国は中華人民共和国に併合され、1955年から新疆ウイグル自治区となりました。

教育面では、1880年代、民族教育の水準を向上させるために、ウイグル人官僚と商人が資金を出し合って、イスラム教の宗教教育と平行して算数、歴史、地理、自然、体育、音楽、美術、ロシア語、アラビア語、ペルシャ語などの科目を取り入れた新式教育制度を導入しました。新式学校は国際教育交流を積極的に展開し、教員を数度オスマン・トルコや、帝政ロシアに派遣する一方、トルコ人やタタリスタン・カザンからタタール人教師を招聘しました。その後、ウイグル人の中から、イギリスや、ドイツに留学する人々も現れました。1930年代から50年代まで、ウイグ

ル、カザフ、ウズベク青年の旧ソ連への留学派遣もあったが、中ソ対立によって中断されました。1962年に十数万のウイグル人、カザフ人がソ連領に逃亡する「イリ事件」が発生し、国境線は完全に封鎖され、ウイグル地方は外国との交流が完全に閉されました。

次第に、ウイグル地方に数百万単位で漢人移民が流入し、各地でウイグル人学校内に並行して漢人クラスができ、また大量の漢人学校が作られました。中学校から外国語教育が導入され、ウイグル人クラスでは中国語、漢人クラスではロシア語を学ぶことになりました。私は小学校から漢人クラスに入りましたが、クラスの半分がロシア人ハーフであったため、ロシア語が自然にできるようになり、中・高一貫して5年間ロシア語学習を続け、成績は全校首席でモスクワ大学留学を夢見ていました。しかし、中ソ関係の悪化が決定的になり、夢は無惨にも水泡と帰してしまいました。

1966年6月に文化大革命（共産党内部の権力闘争）が勃発し、毛沢東の煽動で中学校から大学まで原理主義的な毛沢東思想を信奉する「紅衛兵」が組織され、「造反有理」、旧四（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣）打破を叫んで街頭に進出し、文化財や書物を破壊したり暴力をふるったりして、国全体は混乱状態に陥りました。学校教育は中断され、大学は新入生募集が停止されました。

高校教育を終え学生寮生活をする私たちは、授業が行われず、何をすれば良いのか、分かりませんでした。仕方なく、夏の昼にはダムや湖に行って水泳を、冬にはスケートをしたり、午後は昼寝をしたり、また夜には仲間3、4人と密かに学校図書館に潜入して、世界名著を読みまくりました。当時、毛沢東語録以外の書籍を読むことは非常に危険で、密告されたら「紅衛兵」らによって過酷な糾弾を受けたり、中傷・批判的にされたり、乃至投獄されることもありましたが、幸い密告者は現れませんでした。今振り返ってみると、その3年の間に印象に残ったこととして、一つ目が1967年7月に新疆大学紅湖から溺れかけた14歳ウイグル少年を、翌年8月にウルムチ市三通碑ダムから溺れかけた17歳回族少年を救出したこと、二つ目が数十冊の世界名著を読破したこと、そして三つ目としてスケートが上手になったことです。

1968年になっても、「紅衛兵」の暴走は止まらず、政府機関、企業までが派閥に分かれて互いに反革命とのレッテル貼りや武力闘争を繰り返して、社会は混乱し、統制不可能となりました。毛沢東は上山下郷運動（下放）を主唱し、都市部の中学生から大学生までの紅衛兵（知識青年とも言う）1700万人が地方農村に送りこむことで収拾を図りました。1969年に私も農村に下放されました。当時の農村は非常に貧困で、住む場所は粗末で、牛舎のようでした。食料は雑穀で、野菜がほとんどなく、冬は一日三食がジャガイモだけでした。春に畑に種をまいてから夏までは除草の他、4、5回の灌漑が必要です。灌漑用水の引きごみは村ごとに順番で行い、自分の村の番になると、48時間の間に何十ヘクタールも駆け回り、しばしば自分の体を水の堰止めに使うこともあります。8月から収穫の時期に入り、朝4時から夜8時まで手作業で麦刈り、トウモロコシと豆の収穫を行い、飼料用の草刈りが10月まで続きます。冬は灌漑用水路の上流に沈殿した砂を

除去するために、村から数十キロ離れた山の洞窟に1、2ヶ月住み込みます。自分の村に与えられた長さ数十m幅8m厚さ3mの砂を30数人の青年が上下三列に縦並び、ラリーのように朝6時から夜6時まで、ひたすらスコップで取り除きます。心臓はどきどき鼓動し、足はふらふらになります。この仕事が終わると、村に帰り、2月、3月の間は、積雪20cmの雪道を1時間歩いて石材を採掘するため山に登ります。山頂からは採掘した50、60キロの石を背中に載せて降ります。過酷な肉体労働に加え気温は零下40度前後にもなり、イメージ的にはシベリア抑留に近いものと思います。

1971年半ばから各種の名目（工場などへの就業、政府・党・研究機関などへの登用、病気による免除、一人息子・一人娘・両親不在などの理由による免除など）によって徐々に青年たちの都市への帰還（回城）が認められるようになりました。私にもウルムチ市政府の通訳として採用の打診が来ましたが、近い将来大学は必ず再開されると信じて大学進学を待つと決意しました。隣村と合わせて50数人の知識青年らは徐々にいなくなり、ふと気がつくと、村には知識青年が私一人しかいませんでした。以来、独りぼっちになった私は肉体労働以外の時間で中学から高校までの国語、数学、物理、化学、ロシア語の復習に取り組み、夜2時間しか寝ない日々が2、3ヶ月間続きました。1972年2月前後、小規模な大学入試が試行されました。最初、私に北京清華大学、大連工学院（現大連理工大）、西安交通大学の3大学から進学の申し出がありましたが、私が共産党は依存するプロレタリア階級の出身ではないため、進学許可を貰えませんでした。かろうじて新疆農学院の実験クラスへの進学が許されましたが、プライドを傷つけられた私はこれを拒否して、村に戻りました。半年後、新疆工学院、新疆大学、新疆医学院、新疆農学院で小規模な新入生の秋募集を再開され、選抜試験で私は再び一位の成績を収めました。当時共産党中央は、資本家、地主、富農など反革命階級の子女が共産党の教育の下で味方になる可能性あるとみて、大学募集人数の5%を「教育可能な子女枠」として設けました。私はこの枠で一番厳しい新疆工学院機械学部の新入生35人の中に入りました。

1975年9月、新疆工学院3学部3学科漢民族クラスの105人が卒業を迎え、このうち機械学部の私と地質学部の一人が大学教員として母校に残りました。「文化大革命」終息後の1977年10月、国務院は「全国大学統一入試テスト」の再開を正式に決め、十数年間にわたって中断していた同テストは1978年に再開されました。中央政府教育部の指示により、これからの新入生に対応できるようにとのことで、1967年から78年までの時期に大学に入った新入教員の再養成が始まりました。新疆工学院では最初2年間は基礎科目の強化教育がなされます。ここで全ての試験に合格した人が全国重点大学に発遣され、さらに一年間専門科目の強化教育を受けます。そして要求された科目に合格することにより、はじめて教員として再採用されことになりました。私は大連理工大に派遣され、要求された科目以外に修士課程を4科目履修し、各大学から来た養成教員の中で首席の成績を獲得しました。新疆工学院新入教員150数人の中、教員に再採用された者が41人で、淘汰された3分の2の者が大学の事務や実習工場の現場指導に回されました。私は

新疆工学院で全国大学統一教材を教えられる最初の教員として再び教壇に立ち、専門科目と卒論指導に当たりました。

1978年から、中国では「改革・開放」政策が実施され、中央政府の資金支援により沿海部各省や、内陸部大都市からアメリカ、日本、ヨーロッパ諸国への留学生派遣が盛んにされました。1982年、新疆ウイグル自治区政府に一名の留学生枠が与えられたので、幸い英語を独学した私は選抜されました。5月中旬に北京に赴き、到着した日の午後、すぐに英語で筆記試験と口頭試験が行われました。両方とも合格でき、第一関門を突破しました。この留学予備クラスは、国連による中国の少数民族大学教員を養成するためのプログラムに対応するものとして計画され、まず北京で英語・日本語を半年強化訓練し、その後欧米諸国に12人、日本に2人を1年から2年間派遣するというものでした。学費や生活費がすべて国連の予算（生活費は中国政府発遣留学生の2倍）で賄われ、人員の選抜や教育計画の実施が、中国国務院民族事務委員会（以下国家民委と称す）に任せられています。話によると、最初、国家民委は全国における各自所管の民族大学から20数人を招集したが、少数民族一人もいなかったため、国連の承認を得られなかったとのことです。国家民委は再び所管大学から少数民族を3人招集したところ、再び不許可でした。仕方なく、国家民委は内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区、チベット自治区、寧夏回族自治区、広西チワン族自治区と延辺朝鮮族自治州から少数民族を一人ずつ選抜することにしたところ、漢人と違った顔が増えたことでようやく認められました。クラスは30数人に膨みましたが、何回かの試験によって、半分近くが淘汰され、少数民族6人と漢人10数人が残りました。ここから虐めが始まるのです。少数民族教員がクラスの後部座席に座らせられ、まずテープレコーダやカセットテープが割り当てられず、毎日受け取るべき教材プリントも行きわたしません。この日常茶飯事に起こるこれらのことに対し、漢人メンバーが知らん振りの態度を取り、クラス内には対立が生じ、少数民族教員の不満がついに爆発しました。国家民委に再三抗議した後、教材の提供は改善され、宿舍も某大学の地下室から某軍人施設に移されました。しかし、8月に最終的な選抜試験が行われましたが、成績は発表されず、「みんなが地元に戻って、合格通知を待つ」ようにと国家民委から指示が出されました。少数民族教員6人が成績発表を要求し施設に留まりましたが、1週間後に十数人の武装軍人に追い出されました。その時、私の派遣にかかわった北京出張中のウイグル自治区副主席や教育機関のトップがこの理不尽な対応について、中央政府関連部門に掛け合いましたが、話は全然通じませんでした。

帰省して一か月後、少数民族以外の「十数人が北京から場所を移し、四川の某施設で2か月間の合宿を行い、色々な訓練を受けてから出国する」という情報が伝わってきました。結局、少数民族メンバーに成績通知はなく、招集もありませんでした。私はイギリス・マンチェスター工業大学留学を夢見ましたが、これもまた潰れました。

1984年まで、ウイグル自治区に中央政府から下された留学枠は年に一人か二人にすぎませんでした。ウイグル自治区政府は焦り、1984年11月に、バダイ副主席を団長とする政府教育代表团

を訪日させ、日本私立大学協会にウイグル自治区の大学教員を研究員として受け入れてくれるよう要請しました。

1902年から1914年にかけて、西本願寺第22代門主大谷光瑞が3次に渡り大谷探検隊を日本からウイグル地方に派遣したこと以外は、歴史から見てウイグル地方は、日本との接触がほとんどなかった地域でした。ウイグル地方は、どんな地域であろう、どんな民族がそこに住み、どんな習慣を持つのか、日本人にとって未知の世界でした。

1985年8月、事前調査として日本私立大学協会の森本正夫副会長を団長とする教育代表団がウイグル地方を訪問しました。森本副会長一行は、現地の教育現状を把握し、各民族の風習を調査した結果、ウイグル自治区との間に、人材育成に関する教育交流の基本協定を結びました。同年9月、第1期研究員が来日を実現したことによって、ウイグル地方の教育事業は新しい時代に入りました。

私は自治区第1期赴日研究員特訓クラスの長でしたが、研究分野の変更が要求されたため、1期生より10ヵ月遅れて第2期赴日研究員団長として、1986年7月に北海学園北見大学に来ました。企業管理、品質管理を学びながら、10月から大学3年生と短大2年生の講義「PERT」を担当しました。秋に、新疆ウイグル自治区政府教育代表団が協議のため日本私立大学協会を訪問した際、政府副主席毛徳華団長から「地域開発」専門の人材育成の要請があり、私は1987年4月から北海学園大学経済学部大学経済学研究科経済政策専攻修士課程に入学しました。指導教員森本正夫教授のご指導の下、農業立地、工業立地、観光立地、自然環境保護など幅広い分野の学習・研究ができ、1989年3月に経済修士号を取得しました。同年4月に帰国し、母校新疆工学院に新設された企業管理、品質管理などを担当し、学生諸君に新しい知識を教えることができました。また帰国した研究員1期生、2期生、3期生をまとめてウルムチ市科学技術日本語学会に入会させ、地域の日本語教育と日本との交流を促進しました。1991年9月まで3年連続九州大学のウイグル地区の教育比較学、考古学、文化人類学、医学に関する研究チームの現地調査への協力により、私は1991年10月大学院研究生として九州大学経済学部経済工学科に招かれました。1993年3月まで、矢田俊文教授の下で、優秀な院生たちと一緒に産業配置と地域構造、国土政策と地域政策などについて研究を深めました。

1993年4月、私は北海学園北見大学の講師として迎えられ、1999年4月に助教授に昇格し、同時に日本赤十字北海道看護大学兼任講師も4年間担当しました。1993年5月以来、私は新疆ウイグル自治区教育委員会在日連絡員を担当し、日本私立大学協会の対新疆教育協力事業に直接協力できる立場にありました。以来、この教育協力事業は2007年まで22年間続きました。この間、統計によるとウイグル地方から来日した各民族大学教員は総数250数名に達し、そのうち博士号取得者が76名、修士学位取得者が21名で、つまり修士以上の学位取得者は97名に達し、来日研究員総数の40%近くを占めています。北海学園大学、北海学園北見大学両校で来日教員総数の十分の1にあたる25名を受け入れています。来日した研究員は、ほとんどが大学教員であるため、

帰国後各自の大学において担当科目の講義の質を飛躍的に上昇させました。また質の高い研究成果をあげ、各分野の中堅として活躍しています。一部の人は日本の大学で教鞭をとり、大企業の取締役、技術者になった者も現れ、他方一部の者はアメリカやカナダ、オーストラリア、カザフスタンの大学、あるいは日系企業、さらにはNASAでも活躍しています。

私は2003年4月から北海学園大学工学部に移動し、中国語関係科目、国際寒地都市論を担当し、2005年に教授に昇格しました。我々ウイグル人は昔、モンゴル高原、アルタイ山脈における草原地帯を移動していた遊牧民で、9世紀から天山山脈両側のオアシスに定住し、シルクロードで活躍する国際貿易の民になりました。私の父は1930年代から50年代末までの25年間、キャラバン隊、後に自動車で土産物を運び、中国蘭州を拠点にして、天津、上海、武漢、広州まで商売を広げ、中国人乃至イギリス人、ドイツ人と取引をしましたが、中国東海岸で行き止り、最終的に故郷に戻りました。

運命のいたずらで、私は西安交通大学での3ヶ月間の実習、北京清華大学大学院生での講演、大連理工大での2年間の国内研修によって、最初に大学進学で私を受けてくれなかったこの三箇所を走破し、知識を追求してさらに東シナ海、日本海を渡り、日本に上陸しました。北海学園北見大学、北海学園大学、九州大学、日本赤十字北海道看護大学を点々して、日本の北から南へ、また南から北へと最終的に北海学園大学に定着しました。

私は大学教員生活43年の中25年間を北海学園北見大学と北海学園大学で過ごし、日本人教員は2000人を超え、中国人、モンゴル人、韓国人、ロシア人、カナダ人にも教えました。これらは、私の一生の財産です。今年3月に定年退職を迎える運びとなりましたが、専任教員（工学部）として北海学園大学に迎えて15年間教壇に立ったことは誇りに思います。教職員の皆様は大変お世話になり、多くの方々に支えられて、天真爛漫、真面目な学生にも恵まれ、非常に充実した教員生活を過ごすことができ、心から深く感謝しております。

最後に、日本政府、日本国民、日本私立大学協会、北海学園大学の我がウイグル人に対する数十年にわたるご誠意を忘れず、心温かいご支援に感謝し、この歴史的な友情が子孫代々に伝えられていくことを願います。

略歴（学歴、職歴）

学歴

昭和50年9月	中国新疆工学院（現新疆大学）機械学部機械製造及び工芸設備自動化学科 卒業
昭和53年2月	中国新疆工学院（現新疆大学）教員養成部 入学
昭和55年1月	中国新疆工学院（現新疆大学）教員養成部 修了
昭和62年4月	北海学園大学大学院経済学研究科経済政策専攻修士課程 入学

平成元年 3 月 北海学園大学大学院経済学研究科経済政策専攻修士課程 修了

職歴

昭和44年11月～47年 8 月	中国新疆畜牧庁 職員
昭和50年10月～平成 3 年 9 月	中国新疆工学院（現新疆大学） 専任講師（工作機械設計，工作機械，生産工学，中国語，企業管理，経営管理，品質管理，日本語）
昭和55年 9 月～56年 8 月	中国大連理工大学機械学部 客員研究員
昭和56年 9 月～57年 2 月	中国新疆第一自動車工場職員大学 兼任講師（工作機械）
昭和58年 4 月～59年 3 月	中国大連理工大学機械学部 客員研究員
昭和61年 7 月～62年 3 月	北海学園北見大学 客員研究員（講義「PERT」兼任）
昭和63年 4 月～平成元年 3 月	北海学園大学 非常勤講師（中国語）
平成 3 年10月～ 5 年 3 月	九州大学経済学部経済工学科 研究生
平成 5 年 4 月～ 6 年 3 月	北海学園北見大学商学部 講師（人文科学特別講義，国際事情，日本語，中国語）
平成 6 年 4 月～11年 3 月	北海学園北見短期大学経営学科 講師（ロシア語，自然科学特別講義）
平成 6 年 4 月～11年 3 月	北海学園北見大学商学部 兼任講師（ロシア語，ロシア語会話，中国語会話）
平成11年 4 月～15年 3 月	北海学園北見短期大学経営学科 助教授（ロシア語，自然科学特別講義）
平成11年 4 月～15年 3 月	北海学園北見大学商学部 兼任助教授（ロシア語，ロシア語会話，中国語会話，現代日本の事情）
平成11年 4 月～15年 3 月	日本赤十字北海道看護大学 非常勤講師（ロシア語会話Ⅰ・Ⅱ）
平成11年 4 月～15年 3 月	日本国北海学園北見大学開発研究所 研究員
平成11年 4 月～18年 3 月	学校法人北海学園北東アジア研究交流センター 研究員，研究テーマ：中国経済，中日経済比較，中央アジア政治・経済，東アジア経済協力・安全保障（中国語・日本語通訳兼任）
平成14年 6 月～25年 3 月	社団法人北太平洋地域研究センター 客員研究員，研究テーマ：中国経済，中日経済比較，中国西部大開発
平成15年 4 月～17年 3 月	北海学園大学工学部 助教授（中国語会話Ⅰ～Ⅳ）
平成17年 4 月～30年 3 月	北海学園大学工学部 教授（中国語会話Ⅰ～Ⅳ，中国語言語演習Ⅰ・Ⅱ，中国語文化Ⅱ～Ⅲ，言語と文化，国際寒冷地都市論）

学会及び社会における活動

昭和60年～平成6年	中国ウルムチ市科学技術日本語学会 会員
昭和62年8月13日	長野県高千穂ダムからボート転覆で溺れかけた26歳留学生を救出
昭和62年9月17日	日本私立大学協会と新疆ウイグル自治区政府との定期協議通訳 (ウルムチ市)
平成2年～6年	ウルムチ市科学技術日本語学会 理事, 副秘書長
平成2年8月～9月	九州大学「新疆研究調査団」通訳
平成3年8月17日～25日	中国国家五か年重点研究プロジェクト『中国民族文化大観』, 『中国民族文字與書法法典』 特聘外国研究員沖縄大学長新崎盛輝, 社会人類学者琉球大学教授比嘉政夫「日本学者新疆少数民族調査団」 通訳・案内
平成3年9月7～15日	日本私立大学協会と新疆ウイグル自治区政府との定期協議, 中国人民代表大会常務委員会副委員長賽福鼎・艾則孜との面会における日本語・中国語・ウイグル語通訳(ウルムチ・ホータン市)
平成4年10月	西日本新聞社市民講座「新疆ウイグル自治区の自然環境と経済発展」(福岡)
平成5年5月13日	新疆ウイグル自治区政府訪日協議団と日本私立大学協会との協議通訳(札幌)
平成5年～現在	新疆ウイグル教育委員会の日本駐在連絡員
平成5年～15年	日本ロシア文学会 会員
平成5年～現在	日本経済地理学会 会員
平成5年～17年	日本経済統計学会 会員
平成5年10月	北海学園北見大学市民講座「シルクロードの民族・言葉・文字・文化」
平成6年2月28日	北見東ロータリーにて「新疆ウイグル自治区の資源と経済」をテーマに講演
平成6年7月25～8月6日	日本私立大学協会訪中協議団団員・通訳(新疆ウイグル自治区政府との定期協議, ウルムチ・トルファン・カシュガルなど)
平成7年12月7日	国際ソロプチミスト北見大198回業務例会にて「中日両国の女性について」講演
平成8年6月1～11日	新疆ウイグル自治区政府訪日協議団通訳(日本私立大学協会との定期協議, 札幌, 東京, 広島など)
平成8年6月20日	網走市民大学第21期講座「ウイグルの歴史・風習・文化」
平成9年7月25～8月7日	日本私立大学協会訪中協議団団員(新疆との定期協議・大学交

	流)・兼通訳(日本語・中国語・ウイグル語), カザフスタン, ウズベキスタン, タジキスタンなど中央アジア3カ国視察・兼通訳(日本語・カザフ語・ウズベク語)
平成10年6月21日	新疆ウイグル自治区政府訪日協議団通訳(日本私立大学協会との定期協議, 札幌)
平成11年10月6日	新疆ウイグル自治区政府訪日協議団通訳(日本私立大学協会との定期協議, 札幌)
平成12年7月23~31日	北太平洋地域研究センター主催「北東アジアと北海道の経済交流の可能性と課題」, 「道内建設業界の中国進出の可能性と課題」に関する中国調査団団員・通訳(北京, 沈陽, 長春)
平成12年9月10~20日	北太平洋地域研究センター・北海学園北東アジア研究交流センター(以下HINASと称す)・北海道開発土木研究所研究成果の技術移転に関する中国調査団団員・通訳(ハルビン交通庁・北京市政府・沈陽市政府)
平成13年3月21日	北海学園HINAS・中国社会科学院主催「中国のWTO加盟と東アジアの動向」国際テレビ会議通訳(学園国際会議場)
平成13年5月10~11日	中国社会科学院・北海学園HINAS・北太平洋地域研究センター・北海学園北見大学開発研究所主催「中国・北海道経済交流会」および青島・沈陽視察団員・通訳
平成13年8月6日~8日	中国社会科学院・北海学園HINAS・北海学園北見大学開発研究所・ベトナムホチミン市社会科学院共同研究国際会議に研究員として参加(北京)
平成13年8月9~10日	北海学園HINAS夏季国際セミナー「中国の国有企業改革」中間発表者兼通訳(中国錫林浩特)
平成13年8月26~31日	北海学園HINAS新疆調査団団員・通訳(新疆天山北麓経済地域調査)
平成13年9月1~10日	日本私立大学協会訪中協議団団員・通訳(新疆との定期協議, 政府・大学交流)
平成13年12月5日	JICA地方枠「寒冷地の社会基盤工学」(ウズベキスタン・キルギスタン)北見研修通訳
平成14年2月4日	「中国・台湾のWTO加盟と東アジア経済」札幌・北京・香港・台湾国際テレビ会議司会兼通訳(学園国際会議場)
平成14年2月6・12・13日	JICA中央アジア5カ国青年研修(経済2), 分野別地方(北見)プログラム通訳

平成14年 3 月 6 ～10日	北海道開発土木研究所・中国黒龍江交通科学研究所国際協議および研究発表会通訳（ハルビン）
平成14年 4 月12日	JICA「中国西部大開発研修セミナー」通訳（JICA札幌）
平成14年 9 月 9 ～22日	香港理工大打ち合わせ，中国社会科学院・北海学園HINAS北海学園北見大学開発研究所・ベトナムホチミン市社会科学院共同研究国際会議協力研究員・兼通訳として参加（ベトナム：ホチミン，ハノイなど）。
平成14年 9 月24日	JICA平成14年度『中国西部地区行政実務者研修』プロジェクト「中国西部大開発について」発表およびデスカッションを口頭翻訳
平成14年～15年	朝日カルチャーセンター市民講座「シルクロードの歴史と文化」：「自然と地理」，「民族いろいろ」，「ウイグルの由来」，「文化と宗教」，「生活と風習」，「料理と果物」（全6回）（札幌）
平成17年 7 月14日	JICA札幌「中国西部地区行政実務者研修」セミナーで「西部大開発と貧困撲滅」をテーマに講義・質疑・応答

著書及び学術論文

著書

- 『中国の中小企業改革の現状と課題』，日本図書センター，平成 15 年 1 月，共著
- 『ドイツ，フランス，中国，ロシアとその周辺地域の言語と文化』，共同文化社，平成 16 年 3 月，共著
- 『ドイツ，フランス，中国，ロシアとその周辺地域の言語と文化』改訂版，共同文化社，平成 25 年 4 月，共著

学術論文

- 新疆における経済発展とその課題，北海学園大学開発論集，第 44 号，平成元年 10 月，単著
- 新疆の人口増加と生態環境について，北海学園北見大学論集，第 33 号，平成 7 年 3 月，単著
- 露日語形容詞の比較，北海学園北見大学論集，第 35 号，平成 8 年 3 月，単著
- ロシア語の助数詞について—日本語と比較して—，北海学園北見大学論集，第 39 号，平成 10 年 3 月，単著
- 中国における食糧需給の地域間不均衡と食糧産地の実態，北海学園北見大学論集，第 22 巻第 2 号，平成 12 年 2 月，共著
- 中国青少年の価値観—新疆ウイグル自治区の事例調査—，北海学園北見大学論集，第 25 巻第 2 号，平成 15 年 2 月，共著

新疆ウイグル自治区の経済現状, 札幌メディア総合研究所『CONSTRUCTIONSEYE』2003. VOL. 97, 平成 15 年 10 月, 単著

中国語の量詞の分類について一日本語の助数詞と比較して一, 北海学園大学学園論集第 119 号, 平成 16 年 3 月, 単著

イリ地方の伝統的なウイグル族の民家の特徴について, 北海学園大学学園論集第 124 号, 平成 17 年 6 月, 共著

東北アジア地区中の日中两国経済合作現状与前景, 2004 北東アジア経済協力サミット学術フォーラム (中国・威海市 10 月 7～9 日) で発表, 単著

中央アジアにおける国際貿易の展開, 北海学園 HINAS・韓国大田大学『国際学術発表大会』(韓国大田・平成 17 年 10 月 17 日) で発表, 単著

翻訳

1. 日本国鉦研株式会社『KOKEN 車載式鑽機』取り扱い説明書 (2.9 万字), 中国新疆地質局の要請に応じて日本語から中国語へ, 平成 2 年 8 月
2. Keith Chapman and David F. Walker [Industrial Location Principles and Policies] Part1. Perspectives on Industrial Location. 1. Manufacturing and Manufacturers, 1991, Basil Blackwell. (1.25 万字), 北海学園北見大学の要請に応じて英語から日本語へ, 平成 4 年 11 月
3. M. МАККИББЕН, 「ソ連崩壊後, 経済はどうなる」(0.96 万字), 北海学園北見大学の要請に応じてロシア語から日本語へ, 平成 4 年 12 月
4. 木村和範「1990 年国勢調査・1 %抽出集計について」(0.96 万字), 第一回中日経済統計学検討会'95 年 北京会議, 『経済論集』第 43 巻第 2 号, 日本語から中国語へ, 平成 7 年 10 月
5. Т. Д. АлимоваПРОБЛЕМЫ ТЕОРИИ РЫНКА: К анализу общего Вестник СПбГУ. Сер 5, 1992, вып. 4 (No26) (0.9 万字), 『北見大学論集』第 34 号, ロシア語から日本語へ, 平成 7 年 10 月
6. 平成 14 年 10 月 9～16 日 北海道開発土木研究所・中国黒龍江交通科学研究所国際研究発表会・新疆調査通訳 (ハルビン, ウルムチ)。国際研究発表会にて北海道開発土木研究所研究者論文 5 篇を日本語から中国語へ口頭翻訳:
①森修二「北海道における PMS の研究開発について」②渡邊栄司「盛土の品質管理」③西川純一「新しい土の凍上試験法について」④岳本武彦「北海道における道路の凍上対策について」⑤鈴木武彦「防災雪氷研究室の研究」
7. 黒龍江省交通科学研究所: 戴惠民「季冬地区道路における橋梁カルバート土台の凍上と基礎埋設深度の研究」, A4×25 頁, 北海道開発土木研究所の要請に応じて中国語から日本語へ, 平成 14 年 12 月
8. 同上: 楊福棋「ハルビン・綏化高速道路における SMA 舗装の試験と研究」, A4×33 頁, 同上

9. 同上：高偉「Fibermesh TM 改善によるコンクリート路面の性能及び耐久性の研究」, A4×22 頁, 同上
10. 同上：朱光耀「道路における吹雪と雪害の原因とその予防に関する研究」, A4×27 頁, 同上
11. 同上：慕万奎「永久凍土地帯における橋梁の建築技術の研究」A4×18 頁, 同上
12. 川端俊一郎「中日両国の古代建築」, 中国清華大学建築学院講演会同時通訳, 日本語から中国語へ, 平成 15 年 3 月
13. 川端俊一郎『法隆寺のものさし』付論一・付論二 (p.17~23), ミネルヴァ書房, 日本語から中国語へ, 平成 16 年 2 月



本 城 誠 二 教授

北海学園での 38 年間をめぐって

本 城 誠 二

は じ め に

1980 年（昭和 55 年）に北海学園大学に赴任して 38 年がたってしまいました。

その間、在籍した教養部、経済学部、そして最後に人文学部の教授会と事務の方々、また教務センターの事務の方々、そして法学部・経営学部・工学部の教授会と事務の方たち、学生部・入試課・就職支援センター・学習支援課・庶務課・会計課・図書館、生協の方たちにも本当にお世話になりました。ありがとうございました。

教養部の頃

さて勝手ながらこの 38 年間を少し振り返ってみたいと思います。ご存知の方もいるかも知れませんが、僕は豊平小学校～八条中学校で学んだので、ご近所の北海高校のグラウンドで放課後遊んだりしていました。それが中学卒業の 10 数年後に勤務する事になって懐かしかったです。大学の付近を散歩すると幼馴染の実家がまだあったりしました。今でもあります。

豊平から西野に移り、西高を卒業して一浪後に北大の文類に入学。2 年の後期に文学部英文科に移行し、卒業後は大学院に進学しました。そして修士を修了して 1 年間学園で非常勤をした後に、教養部に英語担当の講師として採用されました。当時は 4 号館が建って数年しかたっていなかったもので、ビジネス・ホテルのような新しい研究室に友達を招いて自慢？したものです。

さて大学にも慣れてきた 30 代の後半の 1989 年（昭和 64 年）にはレスブリッジ大学に交換教授で赴きました。まだ日本経済が好調の時代でしたので、日本文化に関心を持つ学生もけっこういて、Interdisciplinary という科目横断のコースで日本文化を担当しました。この年は天安門事件の年でもあり、中国に帰れるかと不安がる留学生の様子も鮮明に覚えています。当時国際交流の責任者だったチャールズ・マククリーンさんにウオータートン・レーク国立公園から国境を越えてモンタナ・グレーシャー公園に車で連れていってもらいました。チャールズは後に北見の北海学園で英語を教えています。

経済学部～人文学部

この間、大学をめぐる環境は厳しさを増していきます。1991年に大学設置基準の大綱化があって、教養部も改組転換もふくめて検討していました。同時に1993年（平成5年）に人文学部が開設されました。その後1996年から97年にかけて1年間の在外研修の機会をもらい、8ヶ月間ペンシルヴァニア大学（フィラデルフィア市）、4ヶ月間をロンドン大学で過ごしているうちに改組の検討が進み、戻ったときには教養部の解体が決まっていました。総合定期戦を開催している東北学院大学はその少し前に教養学部を開設したので、そのような道もあったのではとも今では考えられますが。

教養部がなくなる前には、教養科目の共通教育科目としての再編に各系列で学部と協議しました。教養部の時代と言うか大綱化の前は、英語4単位、第2外国語2単位が必須でしたが、その後は必修・選択をどうするかが学部によって対応が異なっていて、現在に至っています。その時、後に定年直前に亡くなった法学部の池田衆男先生と何回も協議を重ねた事がその温厚な人柄とともにとても印象に残っています。

1998（平成10年）からは、2000年（平成12年）までの3年は共通教育研究部に所属し、その後2001（平成13年）から2006年（平成18年）まで6年間経済学部にお世話になりました。当時の木村学部長が旧教養部のメンバーをとてともフレンドリーに受けて入れて下さったので居心地は良かったです。ちょうど経済学部に移る4月にニューヨーク市のマンハッタンのアパートに住んで、コロンビア大学の客員研究員として半年のあいだ研修。最後に9.11という衝撃的な事件を目の前で経験しました。町中に星条旗があふれて、その愛国的な情緒に少し辟易したことも記憶にあります。留守中には、経営学科の学部独立の議論が進んでいたようです。

その後当時の熊本学長から、教育改革の最後のステップとして人文学部への再分属の可能性を示唆されて異動しました。人文学部には2007年（平成19年）から2017年（平成29年）まで11年いました。共通教育研究部の3年、経済学部の6年、そして人文学部の11年を足すと、教養部に在籍した18年よりもその後の年月の方が上回ってしまいました。

経済学部でもとてもよくしてもらいましたが、自分の専門の研究に関係する講義ができ、専門演習も担当できたのは、人文学部だったからだと思います。最後には大学院の担当も経験できました。学部の仲間が本を出版するのに刺激され、専門書ならぬ文化エッセイ本を出す事ができました。

教務センター長として

人文学部に移って3年目の2010年（平成22年）には、教務センター長に選出され、学年暦の変更と教養部改組後の12年目の共通教育から一般教育への改編の準備に携わりました。基本方

針については前センター長の森下先生が準備をしてくれていたもので、その軌道に乗っての作業でした。また学年暦の変更については検討員会の強力なメンバーに助けられました。しかし無理に15回実施する事の学生への不利益については反省しています。特に4月の入学式を終えて、すぐにオリエンテーション+履修登録というタイトなスケジュールが新入生にとっては負担だと今でも思います。

2011年には一般教育カリキュラムがスタートし、シラバス Web 入力も始まりました。そして翌2012年には新学年暦（15回授業）と GPA がスタートしました。この年は3月の震災の影響で1学期のカナダ・コースを開講できず、2学期にはレスブリッジでお世話になったこともある島崎先生が来てくれました。2期目最後の4年目の2013年は新学年暦の中での定期試験の対応について、審議を重ねたことが印象に残っています。

英語教育について

最初にふれましたが英語教員として採用され、基本的には英語を読む授業を中心に担当してきました。科目名は「英語 A」とか「英語講読」そして現在の「英語リーディング」と名称が変わってきました。この英語科目は日本では英文学を専門としている教員が戦後ずっと担当してきましたが、近年は英語教育の専門家が担当するようになってきています。これは正しい方向だと思いますが、文学を専門とする教員の英語リーディングの授業も残した方がいいとも思います。

実は英米文学およびアメリカ文化を研究していて英語教育は専門でないという逃げの姿勢がずっとありました。これは英語以外の外国語においても共通している事情かもしれません。とは言え、文学の研究者の観点から英語を解説ができるメリットもあったと思います。しかし数十年前から大学の英語のテキストから文学が追放され、時事エッセイや文化エッセイを中心として、エクササイズが付されて、テープも付いた総合教材に衣替えしました。でもこれも中途半端な気がします。読み・聞く・話す・書くという4技能を1つのテキストとする事は不可能で、現在ではこれは別々のクラスで実施しています。

いずれにしても「読む」事は、英語でもほかの言語でも学校でちゃんと学ぶ事が重要で、他の技能は会話学校や語学研修・留学でも可能だと思います。日本で非難されている英語教育の読みの部分は、アメリカの大学での語学研修で有効な教育であると実感してきました。最初のうちは、南米や中東の学生の会話能力が目立ちます。これは彼らが話す文化に属している事も大きい。しかし少し時間がたって、シャイな日本の学生も話せるようになってきた段階で、日本の学生の英語を読む力が、最初話せた学生の読解力よりもかなり優れている事が多いと気づきました。これは会話力の様にすぐに身に着かない。最終的に総合的な英語の能力は、きちんと読む事ができる学生の方があるという仮説に至りました。

終わりに

この間、大学をめぐる環境はさらに厳しさを増し、若手・中堅の教員たちは、優秀な学生の確保のための試験の多様化、在学生の様々なケアなどで、それまでよりも格段に忙しくなっていると思います。札幌近郊の私大では公立化が決まった大学もあり、さらに道内の大学の再編・統合・合併などもあるかも知れません。

そのような経緯を再考すると 38 年間の前半は比較的のんびりと時期を過ごし、後半は大学を巡る様々な議論や変更に翻弄された思いもあります。もっと主体的に取り組むべきだったという反省もあります。しかしいずれにしても北海学園大学でみなさんと様々な仕事に関わってきて、気持ちよく過ごさせて頂いたのは、大学の学風というか、そこに働く人たちのメンタリティが好ましいものであったからと確信しています。

38 年を振り返っていろいろな事が思い出されて書き連ねましたが、最後に北海学園大学のますますの繁栄と教職員の方々とのご健勝を心から祈念して、筆を置くことにします。

履 歴

1952 年 3 月 9 日札幌生まれ

学 歴

1964 年 札幌豊平小学校卒業

1967 年 札幌八条中学校卒業

1970 年 北海道立札幌西高等学校卒業

1975 年 北海道大学文学部卒業

1979 年 北海道大学文学研究科英米文学専攻修士課程終了

職 歴

1980 年 北海学園大学 教養部講師（英語担当）

1998 年 北海学園大学 共通教育・研究センター助教授（英語、現代文化論担当）

2001 年 北海学園大学 経済学部教授（英語、現代文化論、外国文学担当）

2007 年 北海学園大学 人文学部教授（英語、北米文化論、専門演習担当）

2016 年 北海学園大学 人文学部教授（英語、アメリカ文化特論、大学院担当）

担当科目

一般教育科目：英語リーディングⅠ・Ⅱ、英語文化演習Ⅰ・Ⅱ

専門科目：基礎演習，人文学演習，専門演習，アメリカ文化特論

大学院：英米文学特殊講義

学内委員

教養部：教務委員，入試委員，学生委員，入試出題委員

経済学部：教務委員，入試委員，共通教育委員，共通教育委員会委員長

人文学部：協議員，教務委員，教務センター長（2010～2013年），入試制度検討委員，キャリア支援委員

研究歴

1989年 カナダ・レスブリッジ大学交換教授

1996年 米国ペンシルバニア大学客員研究員

1997年 英国ロンドン大学キングズ・カレッジ客員研究員

2001年 米国コロンビア大学客員研究員

所属学会

日本英文学会，日本アメリカ文学会，日本アメリカ学会，MLA（米国現代語学文学協会）

学会役員

日本英文学会北海道支部評議員，運営委員

日本アメリカ文学会 代議員（2012年～現在に至る）

日本アメリカ文学会 北海道支部 事務局長（2006～2011年）

同 支部長（2012年～現在に至る）

研究業績

1. 単著

『Crossing Borders — ジャズ／ノワール／アメリカ文化』(2016年3月, 英宝社)

2. 論文

- 1) 「ヴァージニア・ウルフの小説における時間」(修士論文)『北海道英語英文学』第24号(1979年77)
- 2) 「生の記号としての時間」『北海学園大学 学園論集』第48号(1984年7月)
- 3) 「Metalanguage としての Nonsense」『北海学園大学 学園論集』第52号(1985年12月)
- 4) 「小説の時間をめぐって」『北海学園大学 学園論集』第55号(1986年12月)
- 5) 「出口なき探究 — ポール・オースターのニューヨーク三部作をめぐって」『主題と方法』, 北海道大学図書刊行会(1994年2月)
- 6) 「ハードボイルドにおける家族という神話」『北海道アメリカ文学』第14号(1998年年6月)
- 7) 「都市文学としてエルロイの『LA 4 部作』を読む」『北海道アメリカ文学』第16号(2000年6月)
- 8) 「ヒップホップという亀裂」『ポストモダン都市ニューヨークグローバリゼーション, 情報化, 世界都市』所収, 松柏社, 2001年12月
- 9) 「ニューヨークと黒人映画のポリティクス」『ポストモダン都市ニューヨークグローバリゼーション, 情報化, 世界都市』所収, 松柏社, 2001年12月
- 10) 「LA ノワール, ディストピアを夢見る — 映画 *Chinatown* における都市表象をめぐって」『北海道アメリカ文学』第21号(2005年7月)
- 11) 「Black Face, White Skin — 『ジャズ・シンガー』における人種の政治学」『北海道アメリカ文学』第24号(2008年6月)
- 12) 「Drop the Beat — ヒップホップとポストモダニティ」北海学園大学『学園論集』第142号(2009年12月)
- 13) 「妄想のアメリカン・ドリーム — 『何がサミイを走らせるのか?』をめぐって —」北海学園大学『人文論集』第55号(2013年8月)
- 14) 「聖なる野生と繰り返す越境 — コーマック・マッカーシーの『越境』をめぐって —」, 『ロード・ナラティヴ』所収, 金星堂(2015年4月)
- 15) 「周縁からの視線 — 人文学／文学／文化をめぐって —」シンポジウム「人文学の新しい可能性」北海学園大学『人文論集』第56号(2015年3月)

3. 口頭発表

- 1) 研究発表「ヴァージニア・ウルフの小説における時間」日本英文学会 北海道支部第 23 回大会 北海道大学 1978 年 10 月
- 2) 研究発表「探偵小説とジャンルの迷宮 — ポール・オースターの作品を中心に」日本アメリカ文学会 第 33 回全国大会 南山大学（名古屋） 1994 年 10 月
- 3) 司会 シンポジウム「都市とアメリカ文学」日本英文学会 北海道支部第 44 回大会 北海学園大学 1998 年 10 月
- 4) 講師「Radical Groove of Hip-Hop Vernacular — ラップの意味が向かうところ」シンポジウム「グローバリゼーション, 情報化, ポストモダン都市ニューヨーク」日本アメリカ文学会 北海道支部第 10 回大会 北海学園大学 2000 年 9 月
- 5) 講師「ヒップホップという亀裂」シンポジウム「グローバリゼーション, 情報化, ポストモダン都市ニューヨーク」日本アメリカ文学会 第 39 回全国大会 同志社大学 2000 年 10 月
- 6) 講師「ゴスペルの水脈」シンポジウム「ソニック・アメリカ」日本アメリカ文学会 北海道支部第 13 回大会 北星学園大学 2003 年 11 月
- 7) 講師「L.A. ノワール, ディストピアを夢見る」シンポジウム *California Dreams, California Nightmares* 日本アメリカ文学会 北海道支部第 14 回大会 札幌大学 2004 年 12 月
- 8) 司会・講師「Jewish Jazz Singer with Black Face — ユダヤ人と黒人の交差する『ジャズ・シンガー』」シンポジウム「アメリカにおけるユダヤ的なもの — 文学・音楽・映画表象をめぐって」日本アメリカ文学会 北海道支部第 17 回大会 藤女子大学 2007 年 12 月
- 9) ワークショップ・コメンテータ 名古屋アメリカ研究夏期セミナー 南山大学 2009 年 7 月
- 10) 講師「Frantic Runner and What Makes Sammy Run?」シンポジウム「ロサンゼルスの文学的表象」, 日本アメリカ文学会 北海道支部第 20 回大会 北星学園大学 2010 年 12 月
- 11) 講師「野生の侵入と帰還 — コーマック・マッカーシーの『越境』をめぐって —」シンポジウム「『亡霊』で読むアメリカ文学〜フォークナー, ゴールドスタイン, C. マッカーシー〜」日本アメリカ文学会 東北支部 東北大学 2011 年 6 月
- 12) 講師「ジャズのスピリチュアリティと 60 年代」シンポジウム「60 年代合衆国音楽と対抗文化 — 文脈と微視」日本英文学会 東北支部大会 岩手県立大学 2012 年 11 月
- 13) 講師「ポストモダン小説考える — 乱反射するテキスト『重力の虹』」シンポジウム「文学史を読む」日本アメリカ文学会 北海道支部第 22 回大会 北海学園大学 2012 年 12 月
- 14) 研究発表「聖なる野生と繰り返す越境 — コーマック・マッカーシーの『越境』をめぐって —」日本アメリカ文学会北海道支部第 163 回研究談話会, 札幌市立大学 2013 年 4 月
- 15) 講師「周縁からの視線 — 人文学／文学／文化をめぐって —」シンポジウム「人文学の新しい可能性」北海学園大学人文学会 北海学園大学 2013 年 11 月
- 16) 司会 シンポジウム「物語はジャンルを横断する」日本アメリカ文学会 北海道支部第 23 回

大会 北海学園大学 2013 年 12 月

- 17) 司会 シンポジウム「日本アメリカ文学会人文学の新しい可能性 (2) — 安酸敏真『人文学概論』を読む —」北海学園大学人文学会 北海学園大学 2014 年 11 月
- 18) 研究発表「文学研究とカルチュラル・スタディーズ ブログ〜本作りをめぐって」日本アメリカ文学会北海道支部第 177 回研究談話会, 札幌市立大学 2016 年 4 月

4. 翻訳

- 1) 「二人の聖戦者」(R・ボーシュ), 「夏の読書」(B・マラマッド), 『しみじみ読むアメリカ文学』所収, 松柏社 (2007 年 6 月)

5. 辞書執筆参加

『リーダーズ・プラス』研究社 (1994 年 6 月)

6. テキスト注執筆

『コモンセンス』南雲堂 (1999 年 10 月)

『英語リーディング 2016』(2016 年)

7. その他の講師等

- 1) 北海学園大学経済学部公開講座 第 5 講講師「アメリカニズムという物語」2004 年 11 月 13 日
- 2) 千歳市市民教養セミナー講師「アメリカ文学とジャズ」ホテル日航千歳 2008 年 7 月 5 日
- 3) 北海学園大学人文学部公開講座第 2 回講師「文学から映像への越境」2008 年 11 月 1 日
- 4) 創造学園豊平塾講師「アメリカニズムという物語」月寒公民会館 2011 年 6 月 2 日
- 5) 創造学園豊平塾講師「アメリカと映画の世紀」月寒公民会館 2012 年 7 月 12 日
- 6) 北海学園大学 開発研究所シンポジウム討論者「現代社会に求められる能力養成に向けた教育的課題と展望」2012 年 12 月 8 日
- 7) 創造学園豊平塾講師「映画についての個人的な視点」月寒公民会館 2013 年 6 月 20 日
- 8) 北海学園大学公開講座 講師「マクベスとモダンの黄昏」2015 年 7 月 11 日
- 9) 北海学園大学人文学部「人文学の挑戦」紀伊國屋 2017 年 3 月 25 日